

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	山本 麻未
論文担当者	主査 松永 寿人
	副査 小山 英則
	副査 竹村 基彦
学位論文名	Clinical characteristics of patients with myasthenia gravis accompanied by psychiatric disorders (精神疾患を伴った重症筋無力症患者の臨床的特徴)
論文審査の結果の要旨	
<p>本研究は重症筋無力症(MG)患者における精神疾患の合併の有無を調査し、その特徴や要因、影響因子について検討したものである。方法として、対象は1995年から2017年に当施設でMGの治療を行い、データが保存されていた103例のMG患者とした。対象患者を、精神疾患の有無によって精神疾患群と対照群の2群に分け、年齢、性別、抗Aセチルコリン受容体抗体価、クリーゼの有無、診断までの日数、入院期間、内服ステロイド量、胸腺腫の有無などのパラメータについて比較した。また、ステロイドと精神疾患の関連性を調べるために、MGと同様に長期間にわたってステロイドを内服する筋炎(多発性筋炎・皮膚筋炎)の患者31例についても調査し、MGの患者群と比較した。結果、103例のMG患者のうち24人(23.3%)が精神疾患を有していた。内訳はうつ病が10例と最も多く、次いで不安障害6例、妄想性障害3例、せん妄2例、身体表現性障害1例、統合失調症1例、パーソナリティ障害1例の診断であった。精神疾患群と対照群について前述の各パラメータについて比較したところ、精神疾患群では、1)女性が高率、クリーゼ歴を有するものが多数、発症から診断までの期間がより長期、入院日数の長期化、などの傾向はあったが、いずれも統計学的有意ではなかった。次に精神疾患とMG自体の病状との関連について調査した結果、精神疾患群の24例のうち12例の患者で、MGの病状との関連を認めた。このうちMG発症以前からあった精神疾患が悪化した例は5例であり、うつの割合が多くみられた。残りの7例はMG発症後に初めて精神症状が出現していた。一部の症例では、精神科の治療介入はあるものの、MGの症状改善とともに精神疾患も改善しており、その後はステロイドを導入もしくは増量しても精神疾患は悪化しなかった。さらに筋炎の患者群において精神疾患の合併率を調査したところ、p値=0.127であり有意ではなかったが、9.7%(31例中3例)とMG群の23.3%よりも低い傾向にあった。内服ステロイドの最大使用量の平均は、MG群で32.3mg/日、筋炎群では39.3mg/日であった。今回の研究結果として、1)精神疾患を合併しているMG患者の半数以上が、MGの病状悪化とともに精神症状も悪化し、その大半の精神症状がMGの治療とともに改善した点、2)筋炎の患者群ではステロイドの内服量にMGと大差はないのに精神疾患を呈する割合は低く、また病状に伴って精神疾患が悪化することもなかった、などを見出した。このことにより、MG患者の精神疾患は、ステロイド投与量より、MG自体の特性(症状の不安定性や増悪など)、あるいは病名告知などがより深く関連するものと考えた。</p> <p>さらに今回の調査でみられた精神疾患合併例における問題点として、1)患者が治療拒否を起こしてMGの治療が滞ること、2)精神疾患への治療介入を要したため対照群に比べて入院が長期化する傾向にあったこと、などが確認された。一方精神疾患に対する治療の追加が功を奏した症例がみられ、MG患者の治療では、精神疾患の評価に加え、この発症の予防や適切な治療が重要であると考えた。</p> <p>本研究は、MG治療における精神疾患の臨床的意義を明確化するなど有益な知見を示すものであり、学位論文に値すると判断した。</p>	